

# オパール色の手紙

——ある女の日記——

平林初之輔

青空文庫



## 四月十三日

こんなことが信じられるだろうか？ でもじつさい妾は自分の眼で見たのだ。あの人が、世界でたった一人の妾の人だと信じきっていたあの人が、全く世間並みの、やくぎな、汚らしい人間であつたなんて。

今朝の十時に、妾はあの人の書齋へはいつて、書棚からミロツセの『コンフェツション』を探していた。すると、何という偶然の一致だろう。ちようと、その書物をぬき出すとたんに、オパール色の一通の封書が妾の脚元あしもとへ落ちてきた。もちろん封は切つてあつた。妾は何の気もなしに、それを拾いあげて全く偶然に、中味をひき出して見た。というのは妾はこれまでついぞ夫の手紙を無断でよんだことはなかつたからだ。

封筒と同じ色のレターペーパーに、紫のインキで次のように書いてあつた。

あなたは洪水のようにお手紙を下さるのね。きつと貴方あなたは朝から晩まで妾の手紙ばかり書いていらつしやるのでしよう。妾、ただ読むだけでへとへとになつちやうのよ。ポ

ストをあけてみると、きつと貴方のお手紙がはいっているんですもの。でも妾、貴方のお手紙をよむのはそれはそれは愉快だわ、貴方のお手紙はいろいろなことを考えさせるんですもの。どんな書物を読むよりもためになるわ。そして、貴方が妾を愛して下さることはよくわかるわ。妾だって貴方を愛せるかも知れないわ。そして現に愛しているかも知れないのよ。貴方は奥さんやお子供さんのあることを恥じていらっしやるのね。ちゃんと妾にはわかるのよ。そしてあなたの心の動きを非常に興味をもって見ているわ。でも仕方がないじゃないやありませんか、そんなこと。貴方の頭でどんなに考えたって解けない問題ですもの。妾ならもう何も考えないことにするわ。そして妾自身何も考えたくないやしないわ。妾には考えたって苦しんだって貴方の影響を脱する力はないんですもの。妾は貴方の百倍も貴方を愛しているんですもの。

四月十一日

妾のN様

貴方のTより

妾はもう少しで、絨氈じゅうたんの上へよろめいて倒れるところだった。まだ昨日の手紙だ。

そして封筒の上書うわがきには、ちやんと「小石川区水道端一丁目十二番地、並木五郎様」と書いてある。でも妾には信じられない。これは、何か途方もない間違いだと思っている。だが、しかし……

## 四月十四日

妾わたしは、今日からあの人の一挙一動に非常な注意をしはじめた。だがあの人にはどこといつて一つ不審な挙動はない。もしあの手紙がほん物なら、あの方は実にこの上ない悪党だ。がそれよりも、あの傍若無ぼうじゃくぶじん人な相手の女はいったい何者だろう？ 「貴方のTより」「妾のN様」なんて実に有り得べからざる文句だ。世の中に凶々しい女は色々あると聞いていたが、これ程までに極端に凶々しい女が現実において得るだろうか？ 「でも仕方がないじゃないですか、そんなこと！」何というバンプ「yamp」= 妖婦、男たらし、浮気女」だろう！ そしてあの人は、昨日まで妾の信じきっていたあの人は、どんな顔をしてこの文句を読んだのだろうか？ 妾のことも、今すやすや眠っている二人の子供のことも忘れて、相好そうこうをくずして読んだのじゃなからうか？ ああ、妾には考えることは堪えられない。

## 四月十五日

また手紙が来た。あの恐ろしいオパール色の手紙が。妾は卑怯な行為だと知りながら、昨日からあの人宛の郵便物を一々しらべてみないではいられなくなつた。正午少し過ぎにあの手紙をポストで発見した時、私は毛虫か何ぞのようになつた。あの手紙一本で、この家じゅうが汚れるように思つた。でも、それでいて、妾を鉄だとすれば、あの手紙は磁石のような吸引力を妾に対してもつていた。妾は卑劣にもあの手紙を湯気で濡らして、そつと開封した。

みんな妾が悪いんです。妾は見栄坊なんです。妾はこの上なく自尊心の強い強情つ張りなんです。でも、貴方の前には妾の自尊心なんぞは、霜柱が朝日の前で威張つてみようとするようなもんですわ。妾は妾の心と身体との全部を貴方に提供します。妾にはもう妾自身の意志も欲望も力も無いのです。貴方の意志が妾の意志です、どうぞ思う存分になすつて下さい。貴方に責めさいなまれることですら、貴方に唾をはきかけられて蛆虫のように軽蔑されることですら、妾には限りなき喜びなんです。もう淋しいことは

何も言つて下さいませぬ。貴方は万能のジュピタのように妾に何でも命令して下さい。妾は、貴方の命令になら、羊のように従順にでもなります。生まれたばかりの嬰兒あかこの四肢をもぎとつて煮え立つフライパンの中へ投げこむほど惨忍にもなります。

T子より

世界でただ一人のN様

世間の女はいろいろな手練手管てれんてくだを使って男を籠絡ろうらくするということは聞いている。しかし、これ程までに大胆に、これ程までに傍若無人ぼうじゃくぶじんに振る舞う女が、実際この地球の上わたくしに生きていて、妾と同じ空気を吸つていようとは知らなかった。あの人の妻であるこの妾は、全く無視されているのだ。ああこの手紙を読んだとき、あの人はどんな顔をするだろう。どんな気持ちができるだろう。

妾は、何も知らぬふりをして、手紙をあの人の書斎のデスクの上へおくことにきめた。あの人は七時少し過ぎに帰つてきた。妾は一緒に食膳にむかいながら、あの人の様子に念入りに注意をくばっていたが、あの人は全く常の通りに冷静だった。妾はその落ち着き払った顔を熊手か何かでかきむしつてやりたい程の欲望をじつと抑えて、食事をすました。

あの人が書斎へはいつて扉をしめると、妾は大急ぎで、しかしあしおと磴音を忍ばせて、扉のそばまで行き、鍵穴に眼をあてた。あの人は回転椅子いすに腰をかけて煙草たばこをふかしていたが、やがて、あの手紙を手にとるとすぐに開封して、一分間足らずで読んでしまうと、ぼいとそれを机の隅へ投げ出してしまった。それから何か横文字の本を本棚から抜き出して読みはじめた。まるであんな手紙には一分間以上の時間をさく価値がないといった風だった。私はほっとした。と同時に自分の卑劣な行為がさもしくなつて、ひどい自責を感じた。あの人はやつぱり妾のものだ！ ああこのことをはつきりと意識することは何という喜びだろう。あの人はどんな誘惑に対してもびくともしない、ばんじゃく磐石のような方にちがいない。

## 四月十七日

昨日もあのオパール色の手紙が来た。だが妾はもう開封しなかった。あの人を少しでも疑うなんて、あの人をふみつけにすることにもなるし、妾自身の愚かさ、醜さを妾自身に証明することにもなるのだから。

しかし、今日、またポストの中にあの封筒を発見した時は、どういうものか、妾は頭の

中が痺れるような気がした。妾は自尊心と嫉妬との激しい戦いを胸の中に感じた。とうとうこの前と同じ手段で、開封するより外にどうすることもできなかった。妾は手紙を読みながら、自分の全身が激しい嫉妬のためにぶるぶる慄えるのを感じた。身体が熱くなったり、寒くなったりするのをおぼえた。それは妾でなくても、とうてい尋常一様な女では辛抱のしきれない恐ろしい手紙だったのだ。

貴方とお別れしてからすぐこの手紙を書くのです。一分間もじっとしてられないのです。ひきつづき、私たちの命のつづく限り、私のすぐ、そばに貴方を感じていないでは、一秒間も生きていられない妾です。こんなに強い、こんなにまじりつけのない愛が、世の中にあつたでしょうか？

貴方はせっかく会つて下さつて何も仰言らなかつたのね、妾も何も言わなかつたけれど。だつて何も言うことがないので。下手な翻訳に原文の意味がまるつきり現れないと同じように、妾の心の中は、口へ出して言うに似もつかない平凡なものになつて、貴方にさげすまれるのが関の山だつてことがあまりにもよくわかつていたのです。貴方がだまつていらつしやつたのもそのためだと思つたわ。でも妾には、あなたがど

んなことを仰言つても、貴方のちよつとした言葉から太平洋ほどの意味を汲みとることが出来るわ。

それは妾が完全に貴方を理解しつくしているからのことです。そして、貴方を深く強く愛すればこそ理解できるのですわ。理解の上に愛が生ずるのではなくて、愛の上にこそ理解が生まれるのですわね。妾は、貴方に対して、世界の誰とだって愛を競うわ。

昨夜、公園のベンチの上で、妾たちの唇と唇とが触れあつたとき、妾はすぐその場で断頭台へつれて行かれて、二十秒以内に素首そくびにきらきら光る斧をあてがわれてもいと思つたわ。

妾はもう完全に貴方に支配しつくされているんです。妾のこの手紙の文字さえ貴方の筆跡にそっくりになつてきたでしょう。妾は妾の心の中に貴方の心をしっかりと感じています。そして未来永劫に感ずるでしょう。どんな障害をも乗りこえて、私たちは凱がいせ旋將軍のように、勇敢に、かたくかたく結びつきましょう。

すべてわたしのものへ  
すべてあなたのものより

妾は読み終わると眼がくらみそうになった。その瞬間妾は人間が眼をもって生まれたことを呪つたのろ。この二つの眼はこんなまわしい、こんな恐ろしい、こんな大それた手紙を見るために今まで視力を保存してきたのだろうか？ 実際そう言えば、この女の筆跡はあの人の筆跡そのままだ。この手紙の中で、妾はただ二人の汚れた愛の「障害物」と見做みなされているに過ぎない。妾の全身の血液は一度に頭へ上がって、頭ががんがんしてきた。こんな苦しみに堪えてきた女があるだろうか？

あの人を奪われたが最後、むろん生きている意味がなくなってしまうのだ。

子供は可愛い。でも子供への愛だけで妾の生命がなくなぎとめられるかどうかわからない。しかし、あのバンプをのこして、おめおめと死ぬことができるだろうか。けつきよく死んでゆくものは敗北者なのだから。

妾はこの前と同じように、あの人を帰って書斎へはいると、すぐに鍵穴へ眼をあてて中をのぞきこんだ。息は殺していたが、胸の大きな動悸どうきが、一寸もある厚い板の扉をとおしてあの人の耳へはいりほしくないかとひやひやした。

あの人はこの前と同じように封をきつて、やはり一分間足らずで読みおわって、机の上へ文殻ふみがらを投げ出し、それから巻煙草たばこに火をつけた。妾の眼のせいかな、今日はあの人のか

すかに慄<sup>ふる</sup>えているようだった。突然あの人は右の腕をのばして、また手紙を拾い上げ、しばらく息を殺して文句に見入っているようだったが、やがてそれを下へおいて、その上へ両手をのせ、両手の上へ顔をふせてしまった。今度こそ妾にはあの人の全身が細かくふるえているのはつきりわかった。

自分の夫が、自分以外の女を思つて慟<sup>どうこく</sup>哭し、ふるへ、もだえているのを見てこらえているなんて、妾は、我ながら自分の神経の抵抗力にあきれたくらいだ。

## 四月十八日

妾は昨夜のうちに何もかも決心した。しかし、朝、何事もなかったように、いつもと同じような顔をして起きてきたあの人の顔を見ると、妾はつい気おくれがして、何も口へは出せなかった。

しかし、あの人が出てゆくと、すぐに口惜<sup>くや</sup>しさがむらむらとこみ上げてきた。だが、ただ口惜しさでも感じていると心に張りがあつて生きてゆかれる。口惜しさがやむと心の中が空っぽになったようで、どうにもこうにも我慢がしきれなかった。

正午過ぎにまたオパール色の封筒が来た、妾はそれを開封するのが恐ろしかった。しかし開封せずにはいられなかった。

奥さんが、妾の手紙をお読みになったらしいんですって？ 開封したような形跡が見えるんですって？ 貴方は、<sup>あなた</sup>それではいつまでもかくしていらつしやるつもりだったの？ かくしてしまえるつもりでいらつしやったの？ 「僕は貴女<sup>あなた</sup>の奴隷です。貴女は僕の女王です」この言葉はそれでは口から出まかせの嘘だったのね。奥さんにかくれて、退屈のぎに妾を相手にしていらつしやったのね？ 世の中には有り得ることと有り得ないことがあります。妾おかしくしてしようがないわ、貴方はそんなにびくびくしないで、みんな奥さんに妾の手紙を見せておしまいなさい。奥さんの言葉で妾を思いきれぬなら、さつさとそうして頂戴！ 何もかもうちあけて奥さんに許しを乞いなさい。その方がもちろん誰のためにもいいことだわ。妾のことなんかちつとも心配ないのよ。妾はもう、そうなればせいせいするだけよ、でも、妾、はつきり予言しておきますが、貴方は妾の今考えている通りになるにちがいないわ。今日は、この手紙をご覧になったら、何もかも奥さんに白状しておしまいなさいね。妾の手紙もみんな見せておしまいなさい。

## N様

T子

あの人はやっぱり妾のことを考えている。やっぱり人間だった。はじめから考えていた通りの、すっかりした、正しい、神様のような人だった。

妾は、久しぶりで朗らかな気持ちで、あの人の帰りをまっていた。

あの人が書斎へはいると、いつものように妾は鍵穴から中を覗きに行った。今日はその必要もないと思っただけけれど、やはりそうせずにはおけなかったのだ。

あの人は、やはりいつものように手紙を読みおわってから、ゆっくり煙草をふかした。

だが五分間ほどすると急に起ち上がった。そして、本棚のあちこちから、本を抜き出し、ページの間から、一つずつオパール色の手紙をとり出した。無慮二十通位の手紙がバナ

ナのように机の上に積み重ねられた。妾は、あんなに沢山の手紙が出てきたことと、あの人が、その手紙のありかを一々掌をさすようにおぼえていたことに、驚いてしまった。

あの人は封筒の中から一々中味を抜きとって、それをデスクの上に重ねた。みんなオパール色の、同じサイズのレター・ペーパーだったので、よく揃った。あの人はそれから、

椅子に腰をかけて、抽斗ひきだしから錐きりと紙撚こよりをとり出し、レター・ペーパーの隅っこに穴をあけてそれを綴りつづこんだ。

この仕事がおわると、あの人は、また巻煙草に火をつけて、ゆっくりと煙を吐き出してから、デスクの上の呼鈴を押しした。

下で女中の返事が聞こえた。妾はとつぜん鍵穴から眼をはなし二秒ほどその場に電気にも打たれたようになってじつとしていたが、女中が階段を上がってくる蹙あしおと音を聞くと、やつと起ち上がって、しのび足で、階段の降り口まで歩いて行った。妾は手真似で合図をして女中を下へかえし、それからまた書斎の扉まで引き返して、こんこんと二つ形式的に叩音ノックして扉をあけた。

「随分ひどい煙ね。少し開けましようか？」

返事がなかったので、妾は、右手のフレンチ・ウィンドーを、片側だけ斜に外へ押しした。「そこへかけなさい！」

あの人は無愛想にそばにある椅子いすを指した。妾はだまって、腰をかけた。何故ともなしに、妾のたつた今までの自信が根底からくつがえされたような気がした。

「これを読んでみなさい」こう言つてあの人は手紙の綴じ込みを妾の前へ押しした。

妾は、無言で（こういう時には何とも返事のしようのないものだ）読み出した。

約百枚のレター・ペーパーを読むのに妾はかれこれ三十分かかった。前に妾が読んだのは、二人のラブ・アフエアの一部分の飛び飛びの断片に過ぎなかったのだが、いま一まともに綴じこまれたこの書類を、順序をたてて読んでゆくと、一つの熱狂的なロマンとなつて、妾の胸をしめ木にかけるように、これでもか、これでもかと圧迫した。妾はできるだけ自制しようと努めたけれど、しまいの方になると、のべつにハンカチをつかつて涙を拭かねばならなかった。

あの人はその間横をむいて煙草たばこばかりふかしていた。あんなにつづけさまに煙草をふかしているのは新鮮な空気をすうひまがないだろうと思われるくらいだった。つい、今日の昼間読んだ最後の手紙を中途まで読んだとき、とつぜん妾は何とも名状すべからざる痛いような感じが胸を通りすぎて行くのをおぼえた。

——あの人は、あの女からこの手紙で命令された通りのことをしているのだ——この考へは実にだしぬけに、妾の意識にひらめいたのであった。どうしてその時まで気がつかなくなったのかいまだに妾にはわからない。

「僕はこの女を愛しているんだ」あの人は妾が手紙を読み了おわるのを待って言った。「あま

り突然で僕は自分でも自分が信じられなかった、だが今はつきりとわかったから白状しておく」

妾わたしはあの人の全身が、その刹那せつな、そっくり、そのまま氷になってしまったような気がした。これほど、冷酷な、これほど惨虐な人間がまたとあるだろうか。妾の全身はポプラの葉のようにふるえた。

「どうにも仕方のない運命だから諦めて、おやすみ、考えたってよい思案の出ることじゃないから、今この場でふつつり諦めて、このろくでなしの、野良犬のような僕を許して下さい！—」

妾はもうそれ以上、鋼鉄の機械か何かから出てくるような、無慈悲な言葉をきいていることはできなくなった。両手でハンカチを眼にあてて、妾はだまって下へ降りて行った。

## 四月十九日

昨夜はむろん妾は一睡もできなかった。涙がとめどなく出てくるかと思うと、急に涙が乾いて、憤怒のために眼がつり上がってくる自分を感じた。妾は気が狂うのではないかと

思つて、その時はつとしたのをおぼえている。夜半頃よなかに急に思い出して妻はしげしげと二人の子供の顔を眺めた。その時も、急に頭の具合がどうかなってしまいはいはないかと思つた。

妻は夜が明けるのをまつて起きぬけに、あの人の室へはいつて行つた。あの人はまだ、ベッド・サイド・ランプをつけたまま眠つていた。枕元に青い表紙の洋書が開いたままになつていた。背を見ると、金字で The Recent Development of Physical Sciences と書いてあつた。昨夜あんなことがあつたのに、そして妻をこんなに苦しませておいて、平気で、本もあろうに、物理学の本を読んでいるなんて、この人の心臓の血は温かいのだろうかと思つた。そしてぐうぐういびき鼾をかいて眠つてゐる顔が、実に憎々しくなつた。

「眠つちやいないだよ」その時あの人はぼつちり眼を開いてだしぬけにこう言つた。

「一秒間も眠れなかつた。僕を殺しにきたのかね？」あの人は片つぽの眼を少し細くしてつけ足した。妻は非常な権幕けんまくで、二階へ上がつてきたのだが、あんまり思いがけない言葉を書いたので拍子抜けがして、予定のプログラムが滅茶めっちゃ々々になつた。唇をわなわなふるわしながら妻は一言も口へ出さなかつた。

「そうそう、それだ、僕の待つていたのは！」とあの人はがらりと言葉の調子をかえて言

った。「今くらい僕はお前の顔の美しかったのを見たことがない。今くらいお前の心の緊張したのを見たことがない。今くらい、僕に対する愛でお前の心がはちきれそうになっていたのを見たことがない」あの人は落ちつき払って、少し口元に微笑をうか泛べながら、飛んでもないことを言いつづけた。「僕らの家庭生活は、近頃無事平穩のために、気のぬけたごむ鞫まりのように無感激になっているんだ。お前も近頃実にだらけきっていたし、僕もこの無刺激な生活には堪えられなかった。あの手紙はみんな僕が書いたんだよ。僕たちの生活への一つの刺激剤としてね。筆跡がどうしてもごまかしきれないので、いつか『妾のこの手紙の文字さえ、貴方あなたの筆跡にそっくりになつてきたでしょう』なんて書いてみたんだ。お前に看破みやぶられるかと思つて、ずいぶん用心したよ。お前が手紙の封をきつたことも、鍵穴から覗のぞいていたこともよく知っていたさ。この効果を見るために僕は四十日間狂言をしていたんだ」

妾はその時は、あの人の言葉をうそともほんとうとも判断することができなかつた。だが、数分間たつと、すべての事情が朝日にとける霜のように氷解してきた。そして実を言えば、あの人があんなことを言わないでいてくれた方がよかつたと思つたくらいだ。安心しきつて、心の張りがすっかり弛ゆるんでしまつたからだ。そして妾の心が弛むことは、あの

人の妾に対する興味がさめることなんだから。

四月二十日

ああ妾の生活は、まるで焦熱地獄だ。妾はどうしてこんなに苦しまなければならぬのだろう。何を信じてよいのか、何を信じていけないのか、妾は全くわからなくなってしまった。また、あのオパール色の手紙が来たのだ。妾はまるで子供の玩具でもさわるように、軽い気持ちで、封を切ってみた。だが二三行読むと妾はもう平気ではいられなくなった。襟首えりくびにぞつと悪寒をおぼえたくらいだった。

ずいぶん罪な人ね。でもそのくらいなトリックで安心するなんて、奥さんもずい分あまい方ね。だけど貴方あなたのなさったことはほんとうに賢明だったと言っていいわ。無益に人を苦しめるのは罪ですからね。最後のときまで犠牲者を安心させてあげるのは、せめて妾たちの義務だと思わうわ。

妾こんなことを空想しているのよ。貴方と妾とがどうせ汽車か何か乗り物にのってど

つかへ行くでしょう。もう東京へは二度とかえつてこない決心でね。いずれそのことは奥さんにもわかるでしょう、一昼夜のうちには。その時分にはまだ妾たちは汽車に乗っているでしょう。どうせ行くとすれば遠いところでしょうから。その時は夜の十二時頃と仮定しましょう。妾は奥さんのことを思つてきつと泣くにちがいないわ。

そうすると貴方は妾を泣かせまいとして色々慰めて下さるでしょう。そのくせ貴方自身も心の中では妾の百倍も泣いていらつしやるくせにね。妾たちは泣きながら闇の中を揺られてゆくのです。汽車の中には、どうせ一昼夜も乗れば辺鄙へんぴなところでしょうから、妾たちの外には誰も同乗者はいないでしょう。妾たちはきつと抱擁ほうようするでしょう。そして貴方は妾に奥さんのことを思わせまいとして、妾は妾が奥さんのことを思つてゐると貴方に思わせまいとして、しかも互いに相手の思つてゐることをよく知りあいながら汽車に運ばれてゆくよ。

そのうちに貴方が、妾のために何もかも忘れておしまいになる瞬間が来るでしょう。妾もその時は貴方のために何もかも忘れてしまふわ。二人の心持ちの動きは言いあわせたように一致するでしょうから、妾そんなことばかり今空想してるのよ。それはそれは淋さびしいのよ。そして何とも口で言えないほど、筆でかけないほど、幸福だわ。

では左様なら。ここのところへ接吻せつぶんしておくわよ。

N様

T子

これは昨日さめかかった興奮を新たに燃え上がらせるためのあの人のトリックなのだろうか。それとも昨日の言葉は、妾を一時ごまかすための、口から出まかせの嘘だったのだろうか？ 妾は手紙をひろげて、つくづく筆跡を見た。だがいくらしらべてみても、あの人の筆跡のようでもあり、またそうでないようでもあるとより言いようがない。あの人が自分の筆跡をごまかすためにわざと書体をかえて書いたものともとれるし、相手の女の筆跡がほんとうにあの人の筆跡に似てきたものだともとれる。

妾は今となってはあの人にそれを問いたすこともできない。そして、あの人が何と答えようと、それを信ずることもできない。そしてあの恐ろしい手紙に記してある最後の日待っているより他はないのだ。その日は来るのかも知れないし、また来ないかも知れないのだ。相手の女は、実際すぐそばにいて明日にもあの人とどこかへ行ってしまいうのかも知れないし、全くこの世に実在しない、あの人の頭の中でこさえた仮空かきうの存在かも知れない。

いのだ。こんな状態に妾はいつまで堪えてゆかねばならんのだろうか？

影なら影ではやく姿を消してしまえばいい。実在なら実在で、はつきりとその姿を現してほしい。

妾はあの人の顔を見るのが、あの人と一緒にいるのが恐ろしくなってきた。あの人自身が、正体のつかめない無気味な影のような気がしてならない。



# 青空文庫情報

底本：「平林初之輔探偵小説選1」【#「1」はローマ数字、1-13-21】〔論創ミステリ叢書1〕 論創社

2003（平成15）年10月10日初版第1刷発行

初出：「文学時代 一卷五号」

1929（昭和4）年9月号

入力：川山隆

校正：門田裕志

2010年7月4日作成

2011年2月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# オパール色の手紙

——ある女の日記——

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 平林初之輔

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>